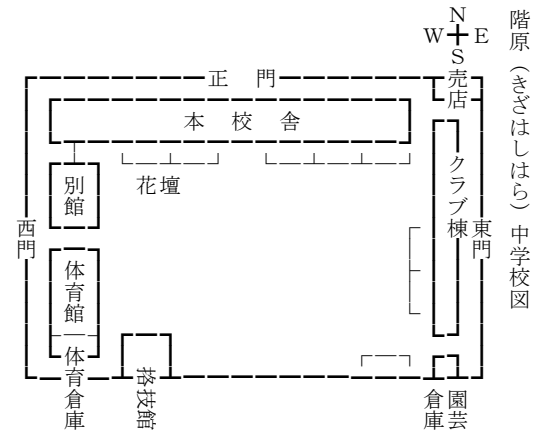


とおこさちうた

くまひじや



……密航者としてついてく可能性のありなしを少年は心のためにためしてみた。しかしもちろん船には二人組みの甲板監視員を立たせるし、それにあのぼろ船は、みづからずい、うまく乗りこむにはあまりにも小さすぎた。

アンデルシュ「ザンジバル——もしくは最後の理由——」

そこまで読んだとき、物音がした。
階原中学図書室の、油のまわってない鉄扉がひらく音だ。
だれかが来たらしい。

開架部分と司書室はうすい壁でしきられている。

図書部員の牧原幸詞（こうじ）は、栞紐をページにはさみこんで、ガラス越しに客がくるのを待った。

やってきたのは女子だった。

図書室には古い本しかないから、ほとんど人がこない。きてもすぐにあきれて帰ってしまう。年に数人というところだ。

しかも、平日ならまだしも、春休み初日にやってくる人間はめずらしい。去年の夏休み、このあいだの冬休み。ひとりもこなかった。

この女子も、はじめて図書室にきたのではないか。人の顔を覚えるのは苦手だったが、幸詞はうすい記憶をたぐって、そう確信した。

女子は司書室に気づかなかった。幸詞が見ていることにも気づいてない。

幸詞はおせっかいするべきかまよった。借りたい本がもしあるとすれば、早く借りて出て行ってほしかったし、借りないのだとすれば、それを早く知りたい。

本のなかにもどりがたかった。

彼女は棚のあいだをせかせかと歩き、ある箇所で止まった。

幸詞は壁に張った配架図をみた。そこは植物の棚だ。

まだ読んではないが、どんな本が並んでいるのかは知っている。

上のほうは事典や概説書、大人むけの難しい本も置いてある。

中あたりは、手に取るのにちょうどいいサイズの本を並べてある。雑学より少し上のレベルで、興味をおおるような本が多い。

女子はしゃがみこんでいた。下のほうには園芸書がおいてある。

しばらくして立ちあがった。何冊か手にとったようだ。

幸詞も同時に立ちあがる。借りるのなら手続きをしなければならぬ。司書のいな

い学校では、それが図書部員の役目だ。
司書室の木の扉をあけると、女子が小さく肩をはねた。おどろかせてしまったらしい。はずみで一冊落とした。

「このカードに学年、クラス、名前を書いてください。それと借りる本のタイトルを書いてください」

女子は脇においてある鉛筆をとると、言われたとおり、貸出カードに記入した。

「期限は始業式の日です。ほんとうは二週間ですが、休みはそういうふうにしていきます。こちらの本は禁帯出なので借りられません」

女子は軽くうなずくと、一冊だけ残して、図書室を出ていった。
カードの字は四角ばっていた。

| | | |
|------|---------|-----|
| 1年3組 | 曾野とおこ | |
| 貸出日 | 借りた本 | 返却日 |
| 3/25 | 土のつくりかた | |
| 3/25 | 秋咲きの花 | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |

おなじ一年生だった。

……そして突然少年は思った、——それなら本に書いてあることは今でもやっぱり正しいじゃないか、それだったら今の世の中にも、『ハックルベリイ・フィン』や『宝島』や『モビー・ディック』の物語にあるようなことが起るんだ。すごいな、と少年は思った、……

アンデルシュ「ザンジバル——もしくは最後の理由——」

図書室は別館の四階にある。

特に用事があるわけではないが、休みの日も幸詞は図書室ですごしていた。

本に囲まれているのが好きだった。

さびれた図書室には、月にひとり、来るか、来ないか。新しい本など一冊もはいらない。学校がはじまったときから、きつとこうだったのかもしれない、と思っている。どこの中学でも似たようなものなのだろうか。

朝、教室にいくよりも先に図書室に向かう。コンビニで買った弁当を司書室に置き、ゆうべ読んだ本を棚にもどして、そのとなりの本をかばんに詰める。ちよつとした時間にも本を読んで過ごし、昼休憩になれば図書室にもどって、弁当を食べながら本を読む。

この繰り返しだった。

土曜日も日曜日も、なにか特別なことがなければ図書室にくる。もっとも特別なことなどない。

学校にくるのではなく、図書室にくる、という日々だ。

どんな本でも読んだ。背表紙をながめて、おもしろそうなタイトルに手がのびる。先月までは社会科学の棚を読んでいたが、一年生を終え、二年生になるまでの渡りの春は、文学の棚をあさはじめた。購入後、一度も開かれたことのない本ばかりだった。

今読んでいるのは「世界の文学」と銘打ったページュのハードカバーで、細かい文字が二段組で並んでいた。

おもしろいストーリーも楽しかったが、文章がつきすすんでいく感覚のほうが好きだった。

だから内容もあまり覚えないうまま、読了することが多い。あとから、あの場面はおもしろかった、と思いだすこともある。

これまで何冊読んだのかわからない。同級生は、スポーツや音楽やゲームやテレビ

やおしゃべりに明け暮れている。幸詞は読書に明け暮れているというわけだ。

形だけ図書部顧問の数学教師、田辺は、幸詞が図書室に入りびたって本を読んでい

るのを、最初は疑い、次に感心した。

「牧原ハ、ヨク本ヲ読ムンダナ。イイコトダヨ」

そのくせ、田辺は一度も図書室に来たことがなかった。入部して一年。必ず部活動をしなくてはいけないから図書部を選んだのだが、それは幸運だったと言っている。先輩もいない。田辺も鉄扉の鍵を幸詞にあずけっぱなしにしていた。

すべてが好都合だった。

だれにも邪魔されたくないし、他人とかかわりあいたくもなかった。

友達はいない。

クラスでは沈んでいる。浮いているのではなく、沈んでいた。

だれも幸詞には気がつかなかったし、それでよかった。

にんじんが、いきり立って叩きつけられ叩きつけるほど、もぐらは、ますます死なないようにみえてくる。

ルナール『にんじん』

自分がほかの人より、すこし違う考えかたをしていると知ったのは、小学校四年生のときだった。

五年生になるとそれがはっきりわかった。

教科書は、もらうとすぐに読んだ。新学期の授業がはじまるまでには読み終えてい

たし、おもしろかったから何度も読んだ。そうすれば、中に書いてあることはぜんぶ覚えられたし、理解できた。

それがふつうなんだと思っていた。

テストで間違うのは、たまたまおぼえ違えてることくらいだった。

そう話すと「イヤミー」と言われた。みんなはそうじゃないらしかった。

本を読むのが好きだったから、学校にも本を持っていていった。ほかにもそういう人はいっぱいいた。読書の時間もあるしそれはめずらしいことではない。

しかし読んでる本がすこし違っていた。大人向けの文庫本を読んでいた。

六年生のときの愛読書は漢文の本だった。国語の教科書に載っていた四字熟語が好きだった。それらはみな中国の古典、つまり漢文から出ているのだから、そちらを読んてみたくなった。

それが反感を買った。本をとりあげられた。

「マタエラソウナ本読ンデルゼ！」

読んでいる本が目の前から消えて、おどろいた。

目をあげると文庫本が宙を舞っていた。キャッチボールのようにやりとりされて、そして、バケツの水の中につっこまれた。

悲しいとか、つらいとか、そういう感情はなくて、どうしてそんな馬鹿なことをするんだろうと思った。本を水に入れたら読めなくなる。そんな簡単なことがどうしてわからないのか。

学校で本を読まなければいい。そう思って、注意するようになったが、そうすると今度は教科書がやられた。

これは困った。

中身が見られなくて困るのではなく、それが濡れていたり、泥や墨汁やマジックで汚れているのを説明するのに困ったのだ。

かといって、反撃する気はさらさらなかった。反応するともっと喜ぶのだろうと直感した。

そういうことがほかにもあった。自分以外にもやられる人間がいて、標的はくるくる変わる。

反応しなければ、いつか嵐は去る。

そのとおり、嵐は去った。

文庫本一冊と、教科書とノートが犠牲になったが、自分の体には何もなかった。

それからだ。幸詞が沈むようになったのは。

発言はしない。

立候補もしない。

課せられた仕事はなるべく短時間でこなし、任せられれば一人で引き受け、しかしお礼を言わせる隙もあたえない。

そのうちだれからも見えなくなる。

しかし、男の子は、風見の雄鶏よりも、とかげたちの仲間だったので、……
フェルロシオ「アルファンウイの才覚と遍歴」

休みのあいだ「曾野とおこ」は毎日やってきた。

禁帯出だった『園芸用語事典』を読みにくる。それに前日に借りた本を返して、新しく別の、やはり園芸の本を借りていく。

いつも正午ちようにやってきた。

彼女の制服はいつも土によごれていた。

だれかにいじめられて、たとえば蹴られたり、踏みつけられたり、地面に突き飛ばされたりして、そういうふうになるのだらうかとも考えたが、聞くのもためられた。

四月二日、その理由がわかった。

前の日、持って帰った本があまりにもおもしろく、明け方まで読んだせいで、寝坊してしまった。

九時過ぎに学校にいくと、グラウンドはすでに運動部が占拠していて、掛け声をあげていた。それを尻目に別館に足を向けた。

そのとき彼女を見つけたのだ。

曾野とおこはひとり、花壇を掘りおこしていた。

なるほど、それでよごれるのか、と納得した。そして自分の推理力の無さを嘆いた。園芸の本を借りているのだ、土仕事を想定するべきだった。

肩くらの高さまで鋤をもちあげると、体重をかけるように、金属部分をざくりと土につきたてる。

そして、二三度、柄をぐいぐいと押して、地面に穴をあける。
それから少し足を後にひいて、今あけた穴のすぐ手前に、また鋤をつきたてる。
地道な作業だったが、着々と土はえぐられていった。

それにしても、と、本を読みかけて宙をみあげた。
なぜ、あんなことしてるんだ？

かばんから生徒手帳をとりだして、校則を読んでいく。活動の有無を問わず、学校の認可したクラブが列記されている。

園芸部があった。

図書部と同じで寂れたクラブなのだろう。彼女はひとりで活動しているに違いない。だからひとりであんなことをしている。図書室には資料を借りに来ている。それだけ

のことだ。

曾野とおこ、学校でただひとり、顔と一致する名前になった。

十二時になると、階段をのぼってやってくる。慣れてしまうと、とおこはひとりで貸出の手続きをした。

自分のカードを抜きだして返却印を押し、本を棚にもどす。新しく借りる本を選び、カードに記入してもどす。そして出ていく。

彼女は、しじゅう無言だ。

幸詞も黙然とおす。

最初の日に貸出と返却の説明をしたっきり、まだひとことも声をかけていないが、鉄扉の音がすると、カウンターについて、そこで本を読みはじめるようにした。

ページから少しだけ目をあげて、所作を見まもる。

はじめてあったときより、すこし日に焼けたように見えた。

毎日校庭で作業しているのだから、日焼けもするだろう。しかし肌は赤くなっただけで、そのまま黒くなりそうにはなかった。

あまり長くない髪だったが、記入のためにうつつむくと、それでも黒髪がおこの頬をかくす。

鉛筆をにぎる指は、鋤をもつには華奢すぎるような気もする。

ぼくは宝物を一つだいに蔵ってある。ただ暦の一日一日から成り立っているにすぎない不愉快な数年のあいだずっと、ぼくはそれを守り、隠し、そしてふたたび取り出した。

グラス『ブリキの太鼓』

休みはそうして過ぎた。

そのあいだに桜が咲いた。今年の春は暖かだった。

とおこは毎朝早くやってきて花壇と格闘していたが、図書室のほかで顔をあわせた

ことは一度もなかった。

登校すると、別館におかうあいだに、とおこの姿をさがした。そういう癖ができてしまった。

とおこはそういう幸詞には気がついていないようだ。一心に土と向かい合っている。桜は咲いたが、花壇には何も咲いてなかった。

しかし、荒れて白けていた土は黒々とした色を取りもどしていた。朝夕の水やりのあとには、土の粒がひとつひとつ動きだしそうだった。

目が疲れたり、本がきりのいいところまでくると、窓をあけて外を見た。司書室の窓からは校庭が見渡せる。花壇は八つある。どこかにおおこがいる。

入学式の日、クラブ活動は休みとされていた。

運動部の使う場所は、体育館もグラウンドものきなみ、式の邪魔になるからだ。掛け声も邪魔になる。

しかし図書部はそんなこと関係ない。

いつもどおり八時にやってくると、埃ひとつなく輝く制服で緊張している新入生たちが、親と連れだって、校庭で所在なくざわめいていた。

幸詞は目立たないように校舎の壁に沿って移動した。

花壇と校舎の隙間をとおると、一年生がこれから入る教室が見える。このあいだまで自分がいた教室もある。

別館に近い端っこの花壇で、とおこが女教師と話しているのを見つけた。

とおこは大きな袋を手にかけていた。

幸詞は肩をすくませて通った。女教師は幸詞に気がつかなかった。とおこをなにやら説得していた。

別館に入る前に、そっと後ろをうかがった。

自分より背の高い教師を仰ぎ見て、とおこは真剣な顔をしていた。やがてうなづいて、花壇をあとにした。

今日は活動できないのだろう。

花壇は水をもらえず、少し乾いたように粒だっていた。

階段をのぼりながら、今日は来ないかもしれないな、と思った。

予想に反して、とおこはすぐにやって来た。

幸詞はまだ今日読む本を抜きだしていなかった。棚を物色しているとき、鉄扉の音がしてびっくりした。

とおこもそこに幸詞がいると思わなかったのだろう、おどろいた表情をみせた。

たぶん目があつたのははじめてだった。

おたがい、なんとなく頭を下げて、視線をはずした。

文学の棚は、扉からすぐ見えるところにある。園芸の棚は、その手前を左に曲がって、二つむこうだ。

本のページに形だけうつむいたまま、目の端でとおこの足取りを追った。

とおこの靴はうすよごれてはいたが、新しい土はついていなかった。

思いもよらない歩幅で靴は、棚のむこうに消えた。

やがてぼくは十四だった。孤独を愛し、よく散歩に出た。太鼓をいっしょに
持って行ったが、ブリキで自己を表現することは節約した、なぜなら、……

グラス『ブリキの太鼓』

重い午前は過ぎた。

式から解放された新入生の安堵で、校庭はいつとぎやかに変わった。やがて彼ら
は教室に吸いこまれた。

このあと新人たちは、去年と同じように、教科書を受け取り、今後愛するべきか憎

むべきか判断しかねる担任教師と顔をつきあわせたあと、校門から出ていく。

図書室にまでそのざわめきはあふれたが、ふたりの沈黙はそれをうち消した。

とおこはカウンターから一番遠い席に腰かけていた。

ふたりは図書室の対角線上にあった。

幸詞はいつにもましてすばやくページをめくっていった。

文章は意味をなさず、しかし文字の発する音（おん）は光に収束されて飛びこんで
きた。音のつらなりだけがしみこんできた。

二段組の本が三分の一おわたところで、幸詞の腹が鳴った。昼時だった。

しかし、このまま司書室にはいりたくはなかった。

まだカウンターにいたかった。

とおこは机の角にあわせるように几帳面に本を積み上げていた。一冊づつ吟味して
いるようだった。

さらに三十分がすぎて、とおこは三冊を選んで、カウンターに持ってきた。いつも

のように無言でカードに記入した。

いつもとなにか違うと思った。

すぐに腕が見えないことに気がついた。

いつもは袖口をひらいて、半袖にまくりあげていた。しかし今日は、セーラー服のカフスが手首までおりていた。

土仕事がなかったからだろう、と推測した。

それからとおこは鉄扉を押し開けて出ていった。

幸詞は押し殺していた息を、深く吐きだした。

そして司書室にはいって、コンビニで買ったアンパンにかじりついた。もう腹は減ってなかったが、いつもより甘く感じた。

下校時刻、鉄扉を閉じて階段を下りる。

別館は上から、図書室、家庭科室、理科室、技術室となっている。

三階に渡り廊下があって、本校舎の三階につながっているが、春休みは閉ざされている。だから一階まで降りることになる。

地面がぬれていた。ぼたぼたと、地面にしみができていた。

無人の校庭を見渡した。

夕日が、幸詞のうしろにそびえる別館のさらに背後から、最後のあかりを投げつけた。

古いコンクリートの校舎は朱色に染まっていた。グラウンドの無数の足跡の凹凸が砂丘のような影をつくり、校庭の東端にあるクラブ棟まで続く。

その東の果てで水がきらめいた。

とおこが水をまいていた。

ホースを、少しでも遠くへ飛ばそうと、高くかかっていた。

いきおいよく出た水が虹の弧を描いた。

腕はブラウスにかくされておらず、水は白い腕の延長であるかのように、花壇をなでた。

とおこのまく、こまかな水の塊が、幸詞の足元に夕明かりをはねかえした。

そのためには、すぐにその場で、世界じゆうのものを何もかも投げ出したってかまわない、というような気持ちでした。鉄砲はわたしの手をすべって草の上へ落ちた。わたしは何もかも忘れ果てて――

ツルゲーネフ『初恋』

二年生にあがるとき、クラス替えがある。
幸詞は七組になった。

どんなクラスになると、かまわなかった。これまでと同じ、雰囲気の下に沈んでしまえば、だれにも気づかれない。

このままクラスがあがるから、卒業まで忍ばばいいのだ。

形どおり、自己紹介からはじまる。最初は担任。そして出席番号順。幸詞はマ行だからあとのほうだ。

幸詞にはだれの声もまともに届かなかった。とおくでクラスのだみ声を聞くかように、意味の取れない音だ。

アイダヒナデステニスブデス——イシダタカシデストクイナカモク——エ

ノヨウコデスヨロシクオネガ——カダケイゴデ——バンド

ヤッ——ブデス——デス——キド——リカ——

ア

「そのとおこです」

はじかれるように顔をあげた。

見慣れたうしろ姿が、自分の左斜め前に見えた。窓側から二列目の、前から三番目、やわらかな人形のように、とおこが立っていた。

細い髪をすかすように、薄い耳が見えた。

日に焼けたほおの曲線があごにすっきりつづき、くびすじがセーラーの襟に消える。肩がさがり気味にみえる。

手は硬くにぎられていて、ふるえているように思えた。

とおこは名前のあとにすぐ「よろしくおねがいます」と、消え入りそうな声で言っている。

イスの音でわれにかえった。とおこを凝視していたのに気がついて、幸詞はあわてふたたび机に目を落とした。

自分の番はそつなくこなした。

多くの情報を与えない。名前と挨拶。とおこと同じだ。

「牧原幸詞です。よろしくお願ひします」

他の人にもそうだったように、とおこはふりかえらなかつた。でも、自分の名前が伝わればいいのに、と思った。

三時間目から授業がはじまつた。

最初から家庭科だった。そのことにだれか男子が不満をもらす。幸詞はみんなのうしろについて、校舎を歩いていく。

二年生は本館二階ときまっていた。西の端まで歩き、階段をのぼる。三階の渡り廊下のおこように別館の家庭科室がある。ひとつ上が図書室だ。

幸詞は家庭科室の引き戸の前で図書室への階段を見あげ、なにげなくうしろをふりかえつた。

列からかなり遅れて、とおこがひとりでやってきた。そのうしろにはだれもいなか

つた。

だれとも談笑せず、教科書を胸に、いつもよりゆっくり歩いていた。そして別館にはいつてきたとき、幸詞がしたように階段をみあげた。

目があった。

とおこのくちびるの端が、すこしあがつたように見えた。

幸詞はあわてて目をそらした。

まだ全体がうちとけていないクラスは、私語もすくない。女子も男子も、いきなりはしゃいで自分を目立たせてしまわないように気をつけているようだ。家庭科室に入ってから、ひそひそとした私語がきこえる程度だった。

自分の鼓動がまわりに聞こえるんじゃないかと思つた。

とおこの笑顔が離れなかつた。

ありったけの力を私はあつめました。純白の肌着のなかから、まっすぐに、しなやかに、からだをのびしました。——そしてとつぜん、花咲くことに、私は痛みをおぼえました……

リルケ「きのうわたしは夢で……」

四時間目は教室にもどった。

昼休憩、どのタイミングで教室を出ようか、幸詞は悩んだ。

新しいクラスだから、自分ひとりがいなくなっても、だれも気づかないだろう。だ

から、やるなら初日からだとわかっていた。弁当は図書室にすでにおいてある。

一年生のあいだも、最初の数日をのぞいて、一度も教室で昼を過ごしたことがなかった。ずっと図書室にいらびたっていたのだ。

しかし今は前方が気になっていった。

この席にすわっていれば、ちらりちらりとではあるが、とおこの後姿を見ることができた。

チャイムが鳴った。

とおこがすぐに立ちあがった。手には色あせたオレンジ色のナプキンにつつまれた弁当箱をもっていた。

幸詞もつられて、教室を出た。

追いかけるつもりはなかったが、同じ方向だった。七歩くらいあとを歩く。さっきと違って早足だ。幸詞には気づいてない。

階段で、とおこは下においていった。

黒髪がみえなくなるまで待って、階段をあがった。

本を手にとっても、文章が目にはいらぬ。

かわりに、単純な音の響きが、からだの奥でこだましていた。

それは風のようにであり、土のようでもあった。

名前が形をなして、そばにいた。

ペンをとりだして、その名を書いてみた。

自分の字は、たどたどしくこぼさかた。

カードの字は、最初とかわらず、角張っていた。

借り出された本はすでに一枚目の裏を数行で終えるところだった。新しいカードを

準備しよう。そして古いカードは？

なにも考えられないようできて、頭のなかではぐるぐると、なにものかがかげめぐっていた。

幸詞は戸惑いを感じる隙もなく、それら知らない感覚にもてあそばされた。

午後は数学だった。図書部顧問の田辺が担当だった。

田辺は幸詞のことをおぼえているのかいないのか、顔をあわせてもまったく反応せず、生徒それぞれの進度を知りたいと、小テストを配布した。

なんでもない問題だったが、幸詞は力をふりしぼらなければならなかった。

そうしなければすぐに別のことを考えてしまう。

視界の端にいつもちいさな背中があつて、そちらに心が向かってしまう。

採点は自分たちでした。

一問、間違えていた。
単純な因数分解の、 $+と-$ を見まちがっていた。

幼児に帰ったみたい、傷だらけになって、ぼくにはもう自分の身体しか感じられなかった。苦痛は導き手のようにまえを歩いていた。ぼくは惚けてそのあとに従った。

パヴェーゼ『川の対話』

田辺は意外にも幸詞のことをおぼえていた。授業のあとで呼びとめられた。
「あのな、図書部なんだけど。もしかしたら、新入生がくるかもしれんからな、準備しておいてくれ」
「準備、ですか？」

「ああ。鍵だけ開けとけばいいだろう」

田辺がいうには、今日は新入生が各部活を見学する日なのだそうだ。去年そんな日があったかどうか、幸詞は覚えてなかった。生徒手帳を見て、最初から図書部に入ろうと決めたただけだし、入ったら上級生がひとりもいなかった、というだけだった。

ふと思いついた。

去年はじめて図書室に行ったとき、田辺だけが、所在なさげにカウンターに座っていたのだ。

「君、新入生かい？ そうか、入部希望か」

二週間くらいは、放課後毎日、鉄扉の鍵をもらいにいった。

やめないとわかると、田辺は、幸詞に鍵をあずけたのだった。

いいかげんだな、とは思ったが、自由に出入りできるほうが楽だと思ったので、承知した。

放課後、図書室の窓をあけると、校庭では、体育部がそれぞれ準備をはじめていた。どこも一年生がくるのだろう。運動部は華やかだ。

しかし、図書部のこの静かさがいいと思った。

だれもこなければいいのに、と思ったとき、鉄扉の音がした。

見学は女子ふたりだった。

とりたてて活動はしてなかったし、ふだんやっていることを説明した。

「毎日、放課後の下校時間まで開館しています。土日や、春、夏、冬の休みも開けています。正規時間外だけど、昼もやっています。借りる人が来たら手続きしてもらいます。本は古いものばかりです」

そっけない説明に一年生は神妙にうなずいて、そのあと、棚を見て回り、やがて帰っていった。

安心した。

そのまま入部します、と言われたら、どうしようか困っていたのだ。

入部されても、どう扱っていいか、わからなかった。何か世話をしなくてはいけないのではないかと、おそれていた。

自分と同じように、ただ、本を読んでいるだけで満足してくれるかどうかわからなかったからだ。

これまでの経験では、そういう人間はまわりに一人もいなかった。

しばらくしてもうひとり、男子がきた。

同じように説明すると、やはり同じように帰っていった。

そのあとはだれもこなかった。安心して、本をめくり、ときどき、開け放しの窓から花壇を見た。

グラウンドは白けていた。三月中旬にあった卒業式くらい一度も雨が降っていない。

風が吹くと乾いた砂がまきあがりそうだと。しかし黒々とした土が、校庭の周囲に点在していた。

八つ。

とおこの耕したあとだ。

数日前から、とおこは鋤のかわりに、ちいさなスコップと袋を持っていた。花壇を渡り歩き、種や球根を植えているらしい。

土の上で、右の手のひらをすくう形にして、種を落とす。そして左手で土をやわらかく覆う。

花どころか、まだ一つの芽吹きさえなかったが、しかしたしかに何かしら命が宿っているように見えた。

四階からはずいぶん離れているが、幸詞には指のしぐさまで見えるようだった。

そしてふと思いたった。

そういえば、今日の昼、とおこは図書室に来ていない。

幸詞は去年のようにひとりきりだった。

10

わたしはその女人をながめるにしたがって、いままで、かたく閉ざされていた内心の扉が開いて来るのが感じられた。ふさがれていた天窓が、あらゆる方向に向かつて開かれ、そのあいだから見知らぬ眺望がのぞかれる。人生と
言うものが、いままでとぜんぜん異なつた姿で現れてきたのである。

ゴ―テイエ「死女の恋」

一週間が過ぎた。図書室にはだれもおとずれなかった。
新入生も、とおこも。

幸詞だけが毎日同じ時間に鉄扉をあけ、とじる日々が続いた。

あの日以来、とおことは目が合わない。話してもいない。

とおこはいつも前を見ているし、ほかのだれとも話はしなかった。お昼は幸詞と同じように外に出て食べているようだった。

幸詞もそのあいだ、だれとも話していなかった。

教室では、とおこを見つけて少しながめたあと、今までどおり本に没頭するだけだった。

ある休憩時間、とおこが席をたったとき、クラスメイトの話し声が耳に飛びこんできた。彼らの声が意味あるものとして飛びこんできたのはひさしぶりのことだった。

そこにはとおこの名前がふくまれていた。

——曾野さんってさ、暗いよね——うん、なんかだれとも話さないし——あの子ね、

小学校のときからああだよ——そうなの？——それでいじめられてた——へえ——男子がだよ。うちらはしてないよ——なんでえ？——知んなあい——でもわかる気がする——ねえ、だれか宿題ヤツテキタ？——エ、ナンノシユクダイ……………

幸詞は自分がかめつらをしていることに気がつかなかった。

さらに一週間はあつという間だった。

五時四十五分。下校時間になった。

幸詞は鉄扉の鍵を閉ざし、階段をおりた。

ゆっくりした歩調で、下から人がきやしないか、たしかめながら、一段一段を降りた。だれもやってこなかった。

校庭では、まだ運動部があとかたづけをしている。目をこらしても、とおこの姿は

なかった。

知らずに幸詞はため息をつく。
最近いつもこうだ。

朝昼夕、教室でも、校庭を通るときも、司書室の窓からも、隙があればとおこをさがしている。

正門を出ようとしたとき、声がした。

「あの……」

ふりかえると、とおこが立っていた。

とおこは軽く肩をゆらしていた。走ってきたのかもしれない。自分の姿を見つけて？
幸詞はどぎまぎした。

「な、なに？」

「あの……、今日、本、返しに行けなかったから」

とおこは軍手をしたまま、胸の前で両手の指で四角形をなぞってみせた。本の形だ

った。二週間の期限日を覚えていたのだ

「あ、いいよ、だいじょうぶ。あしたでもいいよ」

息を吐いてしゃべればいいのか、止めてしゃべったらいいのかわからなくなって、
声が裏返った。

「でも、放課後、部活があるから……」

とおこが言いよんだとき、

「昼もやってるよ。今までとおなじ」

と、いきおいこんで返事した。

「そう」

とおこは安心した顔をした。目の下の、ゆるやかなまるみが、いっそうまるくなっ
たように見えた。

「じゃあ、あした持ってきます」

とおこはくりとふりかえり、校舎のかけに走りさった。笑顔だったように見えた。

息をつくまえに、大きく吸いこまねばならなかった。

1

彼女は僕の臉の上に立っていた

彼女の髪は僕の髪の中にある。

彼女は僕の手の形をし

彼女は僕の目の色をしている。

彼女は僕の影の中に沈む

石が空へと沈むように。

彼女はいつも目を見開いていて

ちっとも僕を眠らせてはくれない。

彼女の夢は いっぱいに光を浴びて

太陽という太陽を蒸発させ

僕を笑わせ 泣かせ 笑わせ

言うことが何もないのになお語らせる。

エリユール「恋する女」

家に帰って本を開かなかったのは、たぶん、はじめてのことだった。

幸詞は先の会話をなんども思いかえした。

そして、自分の声が裏返ったのを、そのたびくやんでもだえた。

眠れなくて、キッチンにいったが、だれもいなかった。家の中にも自分しかない。

父親は今夜宿直だ。帰りは昼前で、登校した幸詞とはすれ違いになる。

水を飲んだあと、たまりにたまったシンクの洗い物に手がのびた。

幸詞の両親は三年前に離婚して、今は父親とふたり暮らした。

父親は地元地方紙の新聞記者をしている。五年前の異動で社会部に配属されたあと、近隣の県にも取材に出向くことが多くなり、忙しくしていた。

幸詞が中学にあがってからは、「おまえを信頼してるから」と言っ、本格的な活動をはじめ、家に帰ることも少なくなった。長いときは一ヶ月近く帰ってこない。

食事はいつも適当にすませた。

朝は牛乳を飲んで、パンを一つかじればよかったし、昼は登校途中に買うコンビニ弁当でいい。夜はたまに作ることもあるが、それも週に一度くらいのもので、あとはやはりコンビニの弁当ですませていた。

父親からは生活費と小遣いをあわせてもらっている。家賃や電気代など、支払いの必要ないろいろはぜんぶ振込みになっていたから、生活費といっても自分のものだけだ。

学校に持っていくお金など、なにか必要になったら、メールしておく。そうすると、会えるときは手渡し、会えなければダイニングテーブルの上に置いてあった。

幸詞は根がまじめだったから、はめをはずすようなことはしなかった。

ただふだんはまったく勉強しなかった。今年の教科書も、すでにぜんぶ目を通していた。少し難しくなったがたぶん大丈夫だろうと推測した。家にいるときは本を読むばかりだ。

物心ついたときから、家には本がいっぱいあった。ほとんどが父の本だった。

父は物を捨てられなくて、子どもの頃の本もすべて置いてあった。

それを読んで、幸詞は育った。

字を読みだしたのが早かったから、家にある本を読みとおしてしまうのには時間がかからなかった。

父親は職業柄雑学で、いろいろなジャンルの本がおいてあった。それが幸詞の読書傾向に反映された。

今年になってから文学を読みはじめた。

洗い物も全部終え、次は洗濯物にとりかかった。終えてもやはり眠られそうになかった。

「あすこには、いいかい、ねむらない人間たちがいる！」

「なぜ、ねむらないのだ？」

カフカ「国道の子供たち」

寝ぼうしてしまった。一時間遅れて、それでも八時には学校についた。

とおこはすでに朝の水遣りを終えたようだ。花壇はしっとりとして、表面を小さくあわだたせている。

しかし姿は見えなかった。

とおくの花壇にいるのかもしれないと思って、爪先立ちしてみたが、やはりいないようだ。

別館を登る。

司書室の窓をあけ、図書室の窓もあけた。

風とともに、朝練の運動部の声も入ってくる。そろそろ解散らしい。

幸詞は舌打ちした。弁当を買ってくるのを忘れたのだ。

時計を見るとまだ時間はあった。幸詞は鉄扉を閉ざし、階段を駆けおりた。売店でパンを注文することにした。

パンと飲み物を注文しておく、昼にとどく。袋に書いてあるメニューの欲しい品に丸をつけ、必要な金額を入れておくのだ。

朝の売店はごったがえしている。

ノート、シャーペンの替え芯、消しゴム、蛍光ペン、そうしたものが売れていく。その脇で、幸詞は専用の袋にお金をいれて、売店のおばさんに手渡した。

教室にもどろうとしたとき、とおこを見つけた。とおこは人ごみの中の幸詞には気づかずに通りすぎた。

思わず後を追った。しかし声をかけることはできなかった。

人ごみをよけるととおこの足取りは、あまり軽々しくはなかった。ぶつからないように、慎重に次の一步を選んでいるように思えた。

学校指定のズック靴に白い靴下。背中はすっと伸びている。

前を見て歩いているが、しかし、それはきっと人を見ているのではないと思わせた。階段をあげる一步一步も、きちんと足場をたしかめるようだった。

踊り場の窓から洩れてくる春の朝日が、とおこの細い髪をおおして目に飛びこんできた。

今日の昼。今日の昼。

なんだか心のなかでつぶやいた。

時間のすぎるのが遅いように思えた。

斜め前では、とおこが熱心にノートを取っている。ときおり教科書に書き込みをしている。

日が少しずつ動いて、南に向いた窓からさしてきた。教室がまぶしく白んだ。三十人の教室は暖かさをとおこし、一気に暑くなってきた。

だれかが窓を開け、かわりにカーテンを閉めた。レールを走るザツという音が、こだまする。

国語教師の声があまり耳に入らない。教科書の文字が、すこしおぼろげに見える。

夢の中での教室には、机とイスが二つしかなかった。
ひとつには自分が座っていて、もうひとつはからっぽだった。だれかいるのか、あたりを見回したが、だれもいなかった。

窓からの風が気がついて向き直ると、女子がひとりすわっていた。

風がゆるやかに吹きつけていて、彼女の髪をゆらした。

声をかけようとしたが、喉には鎖がついていた。鎖は伸びて、教室の外に出ていた。

引っ張ると、じゃらじゃら音をたて、やがて突っ張った。

ふたたび席がからっぽになっていた。

窓も壁もなくなつて、ひとり、校庭の真ん中にすわっていた。

花壇の土がもりあがって、校庭をすべて黒く覆った。

土が自分を飲みこもうとした。

頭を何度かこづかれて、幸詞は目をさました。

「おはよう。牧原君」

国語教師がまるいメガネをとおして、首もかたむけず見下ろしていた。

「す、すみません」

幸詞はあわてて居住まいをただした。

まわりの何人かが笑った。

それは希望 あなたにはじまり
あなたに終わる予言であった。

シェリー「希望のうた」

四時間目が終わりがけたとき、困ったことになったと気がついた。
早く図書室に行きたいが、パンを取りに行かねばならなかった。
売店は学校の東端にあり、別館は西の端にあった。
走って売店に行った。

朝方とは違って、パンを買う生徒であふれかえっていた。注文してなかった者が、
群れて競争しているのだ。ほしいパンは早く言わなければ買えない。

注文した物は別の場所においてある。学生証をみせて、自分のパンを受け取ると、
幸詞は別館へ走った。

とおこはすでに来て、待っていた。

「ご、ごめん……」

あとが続かなかった。走ってきて、そのうえ、一気に階段をのぼったので、息がき
れた。とおこがなにか言ったが、聞き取れなかった。

扉をあけると、とおこはおとなく幸詞のあとについて図書室にはいつてきた。そ
していつものように、自分でカードを取りだして返却印を押し、棚に向かった。

カウンターで息をととのえ、ようやく落ちついてきたときには、とおこは次の本を
選びおわっていた。

細い指がカードに書名を記入する。書き終えて、カードをもどした。このあとは出

ていっだけ。

なぜか、幸詞は思わず声をかけた。

「いつもお昼はどこにいくの？」

「え、あ、どうして？」

とおこはカウンターの幸詞を見おろして、きょんとした顔をした。

自分の質問に幸詞もおどろいた。なぜ声をかけてしまったんだろう。しかし、口からは思ってもいない言葉が飛びだしてくる。

「ううん。いつも最初に教室を出ていくから。ぼくは、ここの司書室で食べてるんだけど」

自分の口なのに、制御できなかった。

とおこはちらっと窓の外を見た。つられて幸詞も外をみた。

外には東棟があり、きもちよく晴れた空が広がっていた。

「ここ、眺めがいいね」

「うん」

「わたしは園芸倉庫で食べてる」と、手にしたお弁当箱を見せた。「明かり通りの窓が小さいから、暗いんだ」

「じゃあ——」そこで一瞬言いよどんだ。こら、自分、なにを言いだすんだ。「——ここで、食べてったら？ その、なにか作業があるのなら、しかたないんだけど」

とおこは出ていった。

なんてバカなことをしたのかと幸詞は悔やんだ。とつぜんあんなことを言われたら、

おどろいて逃げちゃうに決まってるじゃないか。

頭をかかえたとき、また鉄扉の音がした。

「……本、忘れた」

とおこだった。カウンターにはたしかに、とおこが借りようとしていた本が一冊置き去りにされていた。

幸詞はふきだした。

とおこもつられてふきだした。

それから幸詞は、司書室の扉をあけた。

司書室の対面、東側にあるクラブ棟は二階建てで、窓からの視界をさえぎらない。はるか向こうに、呉娑々宇の山が見えた。春の日ざしに新緑をつぎつぎと萌え生じ

て、山そのものが伸びていっているように見える。

去年も、昨日も、この景色を見たはずなのに、今日はもっと美しいものに見えた。

司書室の六人がけのテーブルは、古いものの作りは頑丈だった。革張りのイスも古めかしかかったが、がたつきはひとつもない。

ふたりとも、窓にいちばん近い席に、向かい合わせに座った。

でも外を見た。

幸詞は正面を見つめられなかった。とおこはきっと景色を見たいのだろうと思った。

ときおり髪がゆれて、とおこは弁当箱にかがみこんだ。ふたをたてて、中を見られないようにしていた。

幸詞は袋から揚げドーナツをとりだして、かぶりついた。グラニュー糖のじやりじやりした音が消えると、粒あんの甘さが広がった。

日はもう中天にあった。グラウンドからの照りかえしが司書室の天井を光でゆらめかせた。

チャイムが鳴った。

「え」

同時に飛びあがった。予鈴だった。

幸詞は残りのパンを口につめこんで、ひとつ残した。とおこは中途でふたをしめてナプキンでくるんだ。

「先、行っていいよ」

鍵をかけながら言うのと、とおこは、

「うん。ありがとう」

と駆けおりにいった。

「拙者はあの方をひと目見ることさえできれば、土塀の上縁からであろうと、窓からであろうと、扉のあわいからであろうと、庭園の鉄格子を通してであろうと、少しの変わりもない。なぜと申せば、あの方の美の太陽から発するいかにかすかな光でも、拙者の目に達しさえすれば、わが思慮は輝きをまし、わが神気はとみに旺盛となるはずじゃ。したがって、拙者は知勇いずれの点においても天下無双の、唯一の騎士となるのじゃ」

セルバンテス『ドン・キホーテ』

放課後の司書室には、まだとおこの名残りがあのような気がした。

テーブルに本が一冊あった。とおこはまた本を忘れていったのだ。
(けっこう、ぼけてるのかも)

本を手には校庭を見おろした。

とおこの姿はクラブ棟の南側にあった。

クラブ棟より粗末なつくりのプレハブがひとつ建っていて、とおこはそこからさまざまな道具を引っ張りだしていた。

ふと、園芸部もおこひとりだと気がついた。

運動部と違って、文化部はその活動があまり見えない。

美術部や書道部、写真部、新聞部がある。別館ではほかの部屋でも活動をしている。

家庭科クラブ、理科部、技術部だ。にぎやかなのは吹奏楽部だ。

どこも新生がいるのだろう。今日は、階段をのぼる途中でもにぎわっているのがわかった。

しかし図書室は閑散としていた。

見学にきた三人も、今日は来ないようだった。

新人に来てもらいたいとは思わなかったが、今この図書室はとても寂しい。

校庭を見ていればそれを感じないですんだ。

とおこの作業は機械のように進む。

そのスケジュールも覚えてしまった。水をまくのは、朝と夕方だ。朝は一番に、夕方にはできるかぎり遅くまく。

だから帰るのは下校時間ぎりぎりか、少し過ぎる。見ている幸詞も、最近下校時間

が守られない。

昼はほんとうに、あの倉庫で食べているのだろう。

プレハブは壁によりかかるとして建っていて、たしかに窓も見あたらない。どうして、あんなところで、ひとりで食べるようになってしまったんだろうか。

とおことは小学校が同じだった。

先週、家で、小学校の卒業アルバムをひっぱり出した。

ちがうクラスだったから知らないのも当然だったが、同じクラスにもちゃんと覚えてる人間はいなかった。

アルバムのとおこは、かたい表情でまっすぐカメラを見すえていた。

授業風景などには写っていなかった。クラブのところにもおらず、委員会活動の小さい写真、植物委員のところに見つかった。

植物が好きなのか。だから園芸部なんだな。

すると、今度は違う疑問が生まれた。

う。どうして今年の春から、急に活動をはじめたんだろう。去年は何をしていたんだろう。

急に吹奏楽部の音がひとつにまとまった。

図書室からもっとも遠い、本校舎の東端から、音はとつぜん姿をとってやってきた。

この春はじめて聞くまとまった音だった。校歌の伴奏だった。

続いて、知らない曲が流れた。こっちは、校歌ほどにはまとまっていなかったが、しかし聞ける状態ではあった。

校庭の向こうに、音楽室を見あげているとおこを見つけた。

なんとなくうれしくなった。

こっちに気がつくといいのに。

すると、その思いがどいたかのように、とおこがこちらに顔を向けた。
あわてて隠れようとして、どうして隠れなくちゃいかんのか、と自分でつつこんだ。
とおこの忘れた本を手にして、振ってみせた。
とおこの顔がおどろいたように見えたのは、ほんとはちゃんと見えてないのにそ
う思えたのは、どうしてだろうか。

アシャーストはほとんど地面を這うように曲がって生えた古木に腰を下ろ
し、どきどきする胸をおさえ、すっかり混乱した思いで、さっきミーガンの
髪に美しくかぶさっていた花をほんやり眺めていた——桃色の蕾の中に—
っだけ真っ白い林檎の花が星のように咲いていた。

ゴールズワージー『林檎の樹』

下校チャイムが鳴る。校庭では予想どおり水をまいている。ホースを高くかか
けて水を弧に、恵みの雨さながらだ。

菜種梅雨も地方によって、あたりなかったり。このあたりは、梅雨になっても雨

があまり降らないから、水やりをしつかりしなくてはいけない。県北のほうにいけば、霧が出て、それでもないのに。

小学校のときに社会で習ったのを覚えている。

とおこの忘れた『花言葉』という本を、かばんにいれた。手渡そうと思った。思うと、どきどきした。

どこで渡そう。

正門で待ち伏せするのもストーカーみたいだし、明日教室でわたすなんて論外だし、けっきょく、倉庫に持っていくことにした。

とおこは倉庫をちょうど閉めたところだった。がたつきのある観音扉が、ガタンという音をたててあわさった。

「曾野さん——」

「あ、図書室の……えっと……」

「牧原」

「牧原くん。……ごめんなさい」

かまわないと手ぶりしてみせ、かばんから『花言葉』を取り出した。

「ありがとう……」

はにかむように笑った。

こういうとき、うまく相手から離れる方法を、幸詞は知らなかった。

別れるタイミングをはずすと、気まずい空気が流れる。それをきらってるのに、うまく抜けだすことができない。とおこも帰るだけだったから、ふたりはそのまま校門まで歩いていった。なにか話さなくちゃ。

とおりすがりの花壇には小さな芽吹きがいくつか感じられた。四階からはわからなかった。

「どんな花が咲くの？」

幸詞の緊張がうつったのか、そもそもそうだったのか、とおこもすこしうわずったような声で返事した。

「あ、あんまり咲かない。夏のあいだは五つだけ。……予算ないから」

立ち止まって、花壇を振り返ると、とおくのほうから指をさした。

「あっちがべにはな。それからサルビア、おしとりなでしこ、カモミール」

それから本校舎に沿った花壇をずらっとしめして

「これはぜんぶひまわり」

と言った。

花の名前をいわれてもまったく想像がつかなかったが、さいごのひまわりはわかった。もしとおこの言うようにずらりとひまわりが咲きならんだら、壮観だろう。

「すごいねっ。ぜんぶ自分でやったんだね」

「ほんとはもっといろんな花を植えたかったんだけど……」

「ううん。すごいよっ。ほんと！」

思わずカんでしまった。

「ありがとう……」

羞じらうとき、とおこは涼しげなあごを引いて、視線をすこし左に流す。薄いくちびるだったが、それを内側から弱くかんで、そのせいで口角があがって笑顔に見えた。

一瞬の気づきにくい表情を、幸詞はちゃんととらえて、奥底にしまった。

ゆっくり歩いたためか、正門にはもう生徒の姿はなかった。下校指導の教師がひとり立っていた。

はやく帰れと、ふたりは追いたてられた。門を出るとすぐに三叉路だ。

「あの、わたし、こっちだから」

と東に指をむけて、とおこはあせったように言った。

「ぼくもそっち……」

ふたりは同じ方向になる。北と西へ向かう道は、ちがう小学校の学区だった。

だからふたりはまたならんで歩きだした。

とおこは校庭をいくときとちがって、すこしおどおどした感じだった。まるであたりをうかがっているかように見える。

もしかしたら、自分と歩くのがいやなのではないか。幸詞はそう思った。しかし、それなら走っていてもよさそうなものだ。そういうことができないのかもしれない。自分みために。

ジュリエット「でも見つかったら殺されるわ」

シエークスピア「ロミオとジュリエット」

そのまま無言がつづいた。

幸詞はなにか話題をさがした。しかし思いつくことといったら本のことばかりだった。

口を先に開いたのはとおこのほうだった。

「たくさん、本、読んでるよね」

「あ、うん。本好きなんだ。小さいころからだから、読んでないと落ちつかないんだ。」

家でも読んでるよ」

「すごいね。今までに何冊くらい読んだの？」

「え、何冊かなあ——」幸詞は指を折ったが、ほんとうに数えてるわけじゃなかった

「わかんないや」

そこでまた会話がとぎれた。

学校の東壁に沿って歩いていくと、こんどは、警察学校の高い高い壁があった。

「家は、どこらへん？」

今度は幸詞が口をひらいた。

「篠乃目一丁目」

「おなじだ」

「そうなの？」

「うん。伊藤外科のあたり」

「近くだね。うちは第二公園の前」

幸詞は地図を思いえがく。伊藤外科と公園は一ブロックはさんだ距離にある。お好み焼き屋の角をまがって、やる気のない犬の前をとおり、しばらくいくと公園が見える。公園の西には郵便局とひいらぎでかこまれた大きな家があり、南側は国道へ向かう道になり、北向かいにマンションがある。

「ピンクのマンション？」

「ううん。もう少し国道寄り。アパート」

アパートがあったような気もした。幸詞はうなずいた。

幸詞の家のほうが近い。

何年も前に廃業した伊藤外科の向かいにある古い借家は平屋で、父子のふたり世帯には広がったが、父の荷物が多かったので、これでちょうどよかった。

「——じゃあ、さよなら」

軽くおじぎして、とおこは歩いていった。

お好み焼き屋の角をまがるのを確認して、幸詞は家にはいった。

高めの上がりかまちにすわりこんで、大きく息をついた。

なにか、へんなどころはなかっただろうか。この半時間を反芻すると、日ごろとは違う自分のしぐさや物言いが思いだされて、身ぶるいした。

もっとかっこのいいことが言えないのか。

小説の中の人物はみな、当意即妙、その場その場の雰囲気ですすめるようなせりふを口にする。せりふそのものが、人物を形づくり、物語をおしすすめていく。

そんなことは日常にないとわかっていなくても、自分の行動の幼さはどうだろう。

何度思いかえしても恥ずかしさは薄れなかったが、外が暗くなったとき、腹が鳴った。よろよると立ちあがると、幸詞は自転車で買い物にでかけた。

翌年僕は十五になった。僕の身にいろいろなすばらしいことが起った。つまり僕は沢山のよい本をよみ、叔父さんとおなじくらしいの背だけに伸びたのだ。

サローヤン『我が名はアラム』

七時を過ぎていた。スーパーでは、惣菜の安くなるのを待っている人が、棚の前にたむろしていた。

その群れをさけて奥に向かう。

せんべいとチョコレートとペットボトルの炭酸飲料を籠にいれる。青果の棚からバナナをさがして、ほうりこむ。スーパーで買うものはほとんど決まっていた。本を読むのに邪魔じゃなければいい。少し後戻りして牛乳を入れる。

さいごに、人の減った惣菜の棚をみて、食べたいものがあればそれを買う。

物色してるとき、携帯電話にメールが入ってきた。父からだった。

《今夜は帰ります》

父らしい無駄のない文章だった。

幸詞は豆腐と、父の好きな刺身を買いたした。

帰り道、家をとおりすぎて、お好み焼き屋の角をまがった。

街灯が四つ、すぐに公園が見えてくる。十字路をわたる前に自転車をとめて、古いアパートを見あげた。「福田荘」と、さびの浮いた看板がかかっている。十字路にはほ

かにアパートはない。

まわりこむと駐車場もあって、車が十台置けるようになっていた。アパートも十戸。三つ、明かりがともっていた。

どれかの灯りの下に、とおこがいる。

そう思うと、どの窓も親しいものに感じた。

家に帰ると、浴槽に水をいれた。そのあいだに米をといだ。風呂がわき、飯のたけるころ、父が帰ってきた。

「ただいま。なんか変わったことはあったか？」

「どくはないよ。あ」

思いだして、かばんのファイルからプリントを何枚かだす。

「年間の行事予定表と、こっちは面談か」

五月下旬に三者面談が予定されていた。

「これはなにを話すんだ？ 進路かな。まだ早いか。早くもないか。来年は受験生だもんな。幸詞はどうするんだ。どこを受験するんだ？」

「どこって……決まってるない」

「ぼちぼち考えることだな。さあ、風呂もおおう。これ、冷やしといてくれ」

さしだされた袋には六缶入りのビールがはいっていた。二本を冷凍庫にいれ、残り
は冷凍庫にいれた。

父があがってくるのを待って、冷凍庫からビールをとりだした。

「ありがとう……ああ、家はいいなあ」

コップ半分をあけて、父はビールをつぎたした。

父と向かいあった食卓は十日ぶりだった。新学期になってから二回目。顔はなんどかわせているが、いつもあわただしいだけだ。こんなにゆっくりするのはめずらしい。

「今度の選挙はおおごとになるぞ」

父は幸詞と向かいあうと仕事の話をはじめ。コミュニケーションのつもりらしい。おたがいどんなことをしているか伝えるのが家族のだんらん、というのが父の言い分だ。

幸詞は読んでいた本を脇において父の話に耳をかたむけた。

政権が変わったあとの選挙では、国民が与党の政策に審判をつきつけるのだ、と父はいう。得票によって、過半数を割れば与党は不信任をうけており、大多数をとれば与党は支持されているのだそう。

そんな単純なものなのだろうか、と幸詞は思う。父のいう、不投票の数が多いということ、それだけで与党を支持していない、ということではないのだろうか。だからといってそれは野党を支持しているわけでもない。国がどうして選挙で動くのか、幸詞にはいまひとつわからなかった。

子どものころは、少なくとも一年前はそうした疑問があれば、すぐに父に質問していた。どんなことにも、父はうまく答えてくれた。しかし、今日は話半分しか聞けなかった。

おもしろくないわけじゃない。だがなにか質問しようという気は、ひとつも起らなかった。幸詞の関心事は、選挙にも国にもなかった。

それは、一ブロックはなれた窓のあたりだった。

それは、帰り道聞きほれた声だった。

それは、水をまく白く細い腕だった。

父の話が終わると、今度は幸詞の番だ。

「学校はどうだ。なにかあったかい」

「とくにないよ」

庭の中の涼しい朝、神秘的な森の外れの夕方、僕は、まるで宝を探す人のように、網を持って待ちぶせていたものだ。

へっせ「少年の日の思い出」

しあわせな日はじまった。春休みのおおごとのようにとおこが、毎日図書室にやってきましたからだ。

朝、運動部の連中よりも早く正門をぬけて、幸詞は四階の窓をあけた。それは合図のつもりだった。

朝日がカーテンをゆらす。やがてくる五月を先取りした光を校庭になげかける。恵雨ののち、風とともに、とおこがやってくる。

「園芸部ってけっこうやることがあるんだね」

「今はちょうど時期だから」

「時期？」

「春まきと春植え。秋咲きの花を今からしこむの。でも今日でおわり、あしたからしばらくゆっくりできる」

はじめて言葉をかわしたときにくらべて、とおこの口ぶりは軽くなっていた。それがうれしかった。

とおこの声は低くおだやかで、自分の甲高い声とは正反対だった。自分の声も低ければいいのと思った。

「ゆっくりできるって？」

聞いてばかりの自分がすこしはずかしかったが、そうしないとなかなか話すことが見つからない。

「朝夕の水まきは欠かせないんだけど、しばらくはすることがないの。ときどき草取りしたりするくらい」

水まきをするという言葉に幸詞は安心した。

この春連休は長くて、三日から七日まで五連休だった。そのあいだ、とおこが来ないのではないかと不安になったのだ。しかしまた別の不安がよぎった。

朝夕はいいとして、昼はどうするのだろう。

「連休、どうするの？」

「連休も水まきにくるよ」

「そうじゃなくて……あの、水まきは朝夕なんだよね？」

これじゃまるで、なにか誘っているみたいに聞こえないだろうか。言ったあと幸詞はすぐに悔やんだ。

「えっと、あの……」

とおこがくすつと笑った。

「牧原くんはどうするの？」

「ぼくは——」本を読む、なんて言ったら笑われるかもしれないと思ったがそれ以外は思いつかず、そう言った。すると、

「わたしもそうしようかな」

とおこの、日ざしに負けて、そばかすの薄く浮いた頬が、ふっくらとまるく笑った。

いざ人にすすめるとなると、本を選ぶというのはとてもむずかしい。

濫読の幸詞はどんな本でも読む。おもしろく思った本はたくさんあったが、そのお

もしろさがだれにでも通じるわけじゃないということを知っていた。

それは父のすすめる本が必ずしも自分におもしろかったというわけじゃなかったからだ。

父の好みの本は、記者らしいといえいいのか、ルポルタージュが多かった。おもしろく読めないことはなかったが、それなら幸詞は知識が単純に増える本のほうがおもしろかった。

「いままでどんな本がおもしろかった？」

「わたし、あまり読んでないんだ」

「国語の教科書、読んだ？ 一年のときのもいいよ。おもしろかったの、ある？」

「——蝶の話、あれ、おもしろかった」

とおこが思案気に言ったのは、ヘルマン・ヘッセの「少年の日の思い出」だ。

主人公は、友人のコレクションをうらやましく思う。美しい蝶の標本だ。ひとつを盗みですが、改悛して戻そうとする。だが、標本は崩れてしまっていた。それでも決意して返しにいったが、友人には冷たく軽蔑される、という話だ。

「同じ人の本、読んでみる？」

とおこがうなずいた。

薄い本がいろいろと、文庫をさがした。

「古い本しかなくて、ごめん」

と二冊出したのは『車輪の下』と『デミアン』だった。幸詞の好きなのは『デミアン』のほうだったが、とおこはふたつとも持ってかえった。

まだ十一にもならない子供が、こんなふうを感じる能力があるとは、信じない人がずいぶんあることと思う。そういう人たちにむかって、ぼくはこの事件を語ってはいない。人間をもっとよく知っている人たちに、ぼくは語るのだ。

〈 〉『デミアン』

とおこの読み方は、幸詞とはちがっていた。

とおこはゆっくり読んだ。刻みこむように、ひとつのページに視線をそそぐ。

授業のときでも、あてられて教科書を読むことがある。そこでもとおこはゆっくり読む。

一字、一語、一文を、ていねいに間違えないように朗読する。低い声がこちよかった。

教室がざわめいてなければ、もっとその音をゆったりと聞けるのに、と幸詞はいつも残念だった。

ちよっと休憩したとき、幸詞は聞いてみた。

「おもしろい？」

「うん。むずかしいところもあるけど、おもしろいよ。牧原くんは何読んてるの？——」

黒い髪がふわりと視界をおおった。とおこが幸詞の手元をのぞきこんだのだ。

「——もっとむずかしそう」

太陽のにおいがした。

五月の日ざしは暑いほどだった。

開け放した司書室の窓から風がはいつてこなければ、温室のようになる。幸詞はお茶を飲みほした。

家で買ったペットボトルを持ってきた。ひとりでは気にならなかったが、もしかしたら二人分あったほうがいいのかもかもしれないと思った。

とおこはとおこで気をつかって、白むすびを作って持ってきた。

「これ、おいしい……。遠足にきたみたいだね」

幸詞はその思いつきがとてもいいものと思った。

「あした、行こうか」

「遠足？ どこに？」

「ほら、臥虎山」

窓から見えるのは呉娑々宇の山だが、その反対、学校の真西に臥虎山がある。

丘というには高く、山というには低い臥虎山は、南北に細長く、中央がくぼんで、

いびつなひょうたん型をしている。虎が寝そべっているように見える山だ。

二人の通っていた小学校では、一年生の遠足でその山に行く。六年生につれられていくから、もう一度こんどは新入生をつれていくことになる。自然観察にもいく、この学区の子どもたちに馴染みの山だった。

しかし、中学生になってからは一度も行ったことがなかった。

「なつかしいね。行こうか」

分かちがたく結ばれた二羽の鳥が、同じ木に住まっている。一羽は甘い木の
実を食べ、もう一羽は友を眺めつつ食べようとしない。

ル・クレジオ『物質的恍惚』

公園には遊具がたくさんあった。ふたりはぶらんこに乗り、ロケット型のジャンプ
ルジムに登った。

ロケットの最上階からは西に広がる町並みが見えた。市街地だ。高いビルがいくつ
も見える。街中を走る川が光の筋に見えた。さらに向こうには鈴ヶ峯が見えた。

とおこがふいに言った。

「あの緑がやわらかいのはなぜだか知ってる？」

思いがけない問いは、幸詞には難問だった。

「それはね、あの山が広葉樹の山だから——」とおこはうっとりした顔をした。「——すべての緑がま新しい葉なの」

ロケットの最上階は、外から見ると鳥籠のように見える。ロケットらしく先端がとがっているからだ。

ふたりは格子に手をかけて、なるべく遠くを見ようと、顔をおしつけた。地上がよく見えた。

野良猫が公園をよこぎったが、ふたりには気がつかなかった。

猫のほかはだれもこなかった。連休になると人はみな遠くにいく。近くではなく。

「とおこ、って、めずらしい名前だね」

はじめて名前を口して、幸詞は舌がもつれそうに思えた。とおこもいきなりその音を耳にして、一瞬からだをこわばらせた。

「苗字が曾野だから、続けてよむと“お”が続いてちょっとヘンでしょ」

「そう？ いい響きだとおもうよ」

風の吹くようだとおもった。

「牧原くんの名前は、なんて読むの？ さち、うた？」

自分の名前が別の響きでやってきた。おだやかな、すこし低い、この世でもっともうつくしい声が、その響きをさらに高級なものにした。

こうして昼が過ぎた。ふたりは地上に下りた。

山にはふたつの頂上がある。北の頂から南へ歩いた。

南頂のテレビ塔には町を展望できる場所がいくつもあった。

「ここ、お墓？」

「むかしのね。明治時代の、陸軍基地だって」

「ふうん」

寺の山門のような立派な構えの門をくぐる。

石柱が左右にずらりとならんでいた。文字を刻みこまれた石柱は、隙間なく設置されている。ひな壇のように高低差をつけられて、左右にせりあがっていた。

それは明治以降にこの町から戦争に出た軍人たちの墓標だった。

その奥には大きな碑がならんでいる。その裏手になる場所には西洋風の墓がいくつもあった。戦争で死んだフランス人のための墓だった。

その奥まったところから、南の展望が広がる。遠くに瀬戸内の海が見えた。

海面は太陽にきらめいた。さざなみのちいさなうねり一つ一つが遠くからは角度をつけた鏡の役割を果たして、山に光をはねかえしている。とおこがつぶやいた。

「近くで見たら、もっときつとまぶしいね」

「あしたは海に行こう」

「うん」

……さまさまのアルベルチー又は、舞台に投げられる高専の無数に変わるたわむれのままに、その色、その形、その性格を変える踊り子の姿のように、ひとつびとつちがつていた。……そんなさまさまのアルベルチー又は、あの多様な海——便宜上わたしは単に単数で海と読んでいたが、じつはつぎつぎと変わってゆくあの多様な海——に似ていた。そしてそんな多様な海のままに、ほかでもないニンフのアルベルチー又は、うきだしているのだった。

ブルースト『失われたときを求めて「花咲く乙女のかげに」』

連休さいごの日も晴れた。

海はふたりの予想をこえてまぶしく、目をほそめずにはいられなかった。

橋で地続きになった島は半島然としている。海浴いはコンクリートで打ち固められて遊歩道になっていた。とどころ残されている砂浜で子どもたちが遊んでいたし、釣り人は競って錘を投げていた。

この五日間でふたりはずいぶん打ちとけたが、たえまない波の音がそれをさらにながした。

とおこの家庭は幸詞の家と似ていた。父と子がふたりで暮らしている。とおこの父はタクシー運転手をしているが、それは今年になってからはじめたものだった。それで時間の余裕ができ、とおこは園芸部員になったのだった。

「小学校のときは植物委員だったし、好きなんだ、花とか土とか」

「春から、がんばってたよね」

そう言うと、とおこは笑顔を見せた。最初のころのはにかむような表情は残っていたが、視線は幸詞の目元にあった。

島の突端からはきのうよりも広く海が見渡せた。島々は海に浮かんでいた。船が渡っていくたびに、静かな海面に大きな波が立った。浜はこまかな砂だった。貝殻も洗われて砕けていた。うちあげられた海草にはアメフラシの卵がまじっていた。

日ざしが強かった。ふたりはどちらもともなく靴も靴下もぬいだ。

「熱い」

とおこが言う。乾いた砂は足の裏を焼くようだった。

「こっちは冷たい」

波打ちぎわでとおこは、制服のスカートをすこしたくしあげて、腰にはさんだ。白

い足がひざの上まで見えて、幸詞はどぎまぎした。

瀬戸内の香りは、なまぬるくからみつく。陽にさらされて、時間が引き延ばされている感覚だった。

それはとおこも同じだったらしい。

太陽がいつのまにか西に傾いていたことに気がつかなかった。はじめて、とおこは夕方の水やりをできなかった。

「ごめん」

「一日くらい、だいじょうぶ。毎日ちゃんとあげてるんだから。今朝もあげたんだし。あした朝、たっぷりあげれば、だいじょうぶ——」

海に近づいて、太陽は大きくなっていった。とおこは間をあけて、それから、「——つれてきてくれて、ありがとう」と言った。

行きを路面電車できたふたりは、歩いて帰ることにした。
歩いて一時間かからない距離を、少しでもひきのばしたいと、幸詞はおもった。
夕方はまだ肌寒く感じる。しかし、手のひらからおたがいのぬくもりが伝わって、
帰り道、少しも寒くなかった。

2

このように植物の霊は、無数の誘惑的な形をとって、わたしたちの周囲にた
わむれ、わたしはできるかぎりそれと親しんだ。

カロツサ「幼いころ」

立夏をすぎれば日も長ける。次第にとおこの登校時間が早まっていった。地面が太
陽の光で熱せられる前に、水をまいたほうがいいからだ。暑くなる前に水がしみわた
らねば、根に悪い。

幸詞もあわせて出かけたが、別館には上がれなかった。七時に警報装置が切れるま
では開錠できなかった。

一度警報を鳴らしてしまったことがある。

学校には宿直がいて、飛んできた。幸詞は平謝りしたのだった。それで幸詞は七時になるまでは、とおこの手伝いをした。ひとつひとつの花壇の新しい形を教わり、そうでない草を摘みとるのが幸詞の仕事になった。

園芸倉庫近くの東南の花壇から、とおこは水をまきはじめる。

別館近くの北西の花壇から、幸詞は草を摘みはじめる。

途中ふたりは交差し、また離れていった。端までくると反転し足早にもどってふたび交差した。ふたりで道具をかたづけ、それから別館にのぼった。どの運動部がくるよりも早い時間に作業が終わった。

花壇はどれも緑がしげっていて、幸詞にはいつ花が咲いてもおかしくないように思えた。具合がわかるのはひまわりだけで、花にはまだまだ遠いようだったが。

四階から見る校庭は、緑にふちどられた額縁のようだった。

最初に咲いたのはカモミールだった。

春休みにまいて一ヶ月後には、丈の低い株が花壇一面に密生した。ときどきとおこがまびいたが、繁殖力が旺盛であつというまに花をかかえた。

か細い茎の先に重たげに盛りあがった黄色の蕊を、白く細い花びらがかこむ。ちょっとした風にすぐにそよぎ、ふわりとリングのような香りをはなった。

「ねえ、曾野さん」

教室で本を読んでいたとき、だれかがとおこを呼んだ。顔をあげると、よく日にやけた女子がおこのそばに立った。

「あの花、曾野さんが育ててんだよね」

「……うん」

「すごくきれい。かわいい花だね」

不安げだったとおこの顔があかるくなった。

昼休憩、とおこは英田日南（あいだひな）の話に終始した。

「英田さん、テニス部なんだった」

カモミールの咲く花壇はクラブ棟側の一番北になる。そのあたりは、テニス部がつかう臨時コートだ。放課後になると部員たちが整地しネットを張って練習する。花壇をかこむレンガが腰かけにちょうどよいのだという。

「うれしいね」

「うん」

幸詞はというと、とおこが笑えばそれがうれしかった。

そのとき月は薔薇のおおむいた顔の上、

おおむいて、あわれ、愁いの——あなたの顔の上に落ちかかる。

ポー「ヘレンに贈る」

野外活動の林間学校は、北に接する県の山中でおこなわれた。二泊三日、登山とレクリエーションとで、クラスの親睦を深めるのが目的だ。

しかしそんなものは深めたいと、ちっとも思わなかった。

林間学校では、普段どおりの生活はできなかった。本を読む時間と、とおこと過ごす時間が失われた。

しかし自分のがまんしなくてはいけない、と言いつけさせた。

このところ目に見えて、とおこは明るくなってきた。以前クラスメイトがしていたうわさ、かつていじめられていた、そのようには思えなかった。

それには、英田日南が一役買っていた。

英田は人なつこく誰からも好かれる性格だった。英田が仲良くしている相手が巻きこまれないわけがない。

とおこはクラスメイトとも、おずおずとだが交流することが多くなった。

喜ばしいことだったが、自分が同じようであるうとは思わなかった。

幸詞のほうははいかわらずクラスで沈んでいた。

教室ではとおこと一度も言葉をかわさなかったし、とおこのほうもそれを察しているのか、別の理由なのか、近寄ってこなかった。何も打ち合わせしないが、ふたりはそういうふうにした。

最初からそうだったから、ふたりの親密さはだれにも気づかれなかった。

林間学校のプログラムが、幸詞には幼く思えてしかたなかった。

歌も、芝居も、決意表明も。

すべて仕組まれたことを台本どおりにこなしていくのは、ばかばかしかった。

それでもやってきたのは、とおこと少しでも離れたくないからだ。とおこと知り合う前は、欠席をもくろんでいたからだ。

期間中すこしも接点がなかった。しかし時折り、盗み見るようにとおこの姿をさがし、見つけると安心した。

深夜、目が覚めて、バンガロー仕立ての寝所からはい出した。

街灯はなく、細い月明かりだけが広場を照らしていた。

キャンプファイヤーの燃え残りが、広場のまんなかでくすぶっている。燠火が赤く、みみずの這うように見えた。

誰かいた。

ふたりいるようだった。

トイレの近くの暗闇に、ひとつの影になって立っていた。

名前はわからなかったが、ひとりにはクラスで一番背の高い男子だった。かたわらに
いるのは、知らない女子だった。

幸詞は見ないふりをして、トイレにはいり、すぐに出た。影があとを追ってきた。

「おい、牧原」

影が幸詞の首に腕をまきつけてきた。

「先生に言いつけんよ」

「言わないよ」

「まあ、いちおうな。言うようなキャラじゃないけどな、おまえ」

そういうと、影はまた闇に帰った。

翌朝、その影は形をともなって、同じバンガローで起床した。ジャージの上着の左
胸には、松中と刺繍してあった。またひとり名前を覚えた。

松中は幸詞の視線に気づくと、にやっと笑った。幸詞は唇をかたくむすんで、うな
づきかえした。

そして彼は、その眼が物をまともから見、少しももの怖じしない眼であることを知った。

ヘンリー・ジエイムズ『デイジー・ミラー』

学校に戻ったのは夕方近かった。校庭で終了式がおこなわれ、各自解散となった。しかしとおこと幸詞はすぐに門を出なかった。

出かける前の朝に水をやったきりだからだ。四回分の散水をおこなっていない。その間、雨は一度もふらず、なのに気温は高かったようで、土の表面はかわいていた。

とくにひまわりの花壇は下草もなく、かわくのが早い。

とおこと幸詞の行動に気づくものはいないはずだった。みな、足早に家をめざすところが予想外の声が聞こえた。

「牧原くんって、園芸部だったの？」

英田日南の声だった。園芸倉庫でホースを取りだしていたところに声をかけてきたのだ。

「とおこといっしょに帰ろうと思ってさ。そしたら牧原くん、いるんだもん、びっくりした」

幸詞は取り乱して、発する言葉を思いつかなかった。意外にも落ちついて答えたのは、とおこだった。

「ときどき手伝ってくれてるんだよ」

「へえ。なんだ、意外にいい人じゃん」

そう笑うと、英田は荷物を置いて手伝いをはじめた。

「さっさとすまそう。で、いっしょに帰ろうよ」

帰り道は同じ方向だった。英田の住む三丁目は、とおこのアパートの前にある公園からさらに東にいったところだ。

英田は道すがらずっとしゃべっていた。

野外活動のちいさな出来事だったり、所属しているテニス部での練習の話だったり、家のことだったり、夏休みの予定だったり、話題があちこちに飛んだ。それでいて一貫性があるような話しぶりだった。

とおこはその話にひとつひとつうなずいていた。幸詞の話に耳をかたむけると同じで、かみしめるようにあいづちをうった。

「牧原くんってさ。いつも教室にいないよね」

「あ、と、図書部だから、昼は図書室に……」

「ああ、だからいつも本読んでるのか。難しそうな本ばかり読んでるよね。一年ときからさ」

同じクラスだったとは知らなかった。もっとも誰一人覚えていなかったが。

「覚えてないんですよ。それはよくないよ」

英田が軽くにらんだ。

次の日は土曜日で学校は休みだったが、幸詞はいつものように登校した。そして草をつんだ。この数日にはえた雑草の芽を、ひとつのこらずつみとった。

「きのうは、びっくりしたね」

「うん」

とおこの言葉に素直にならずいた。夕べは、お好み焼き屋の角をふたりが曲がるのを見送ったのだ。気おされてばかりだった。嵐のようでもあった。

月曜日、昼休憩にも嵐はやってきた。

売店のパン袋を持って、英田が図書室にきた。

ガラス越しに司書室の中をうかがい、そこに知った顔を見ると、いきおいよく扉をあけた。

「なんだ、とっても仲良しなんじゃん。いっしょにお昼食べてさ。おじゃま？」

入っちゃいけない、とはいえない。部外者というのであれば、とおこは部員ではない。英田はとおこのとなりに腰かけた。

「ま、今日だけだから」

まったく物怖じしない様子だった。

パンにかぶりついて、片手で幸詞の読みさしの文庫を押しあげ、背表紙をたしかめた。

「なにこれ？ 『デイジー・ミラー』？ 知らないなあ。うわ、字い小っさ」

すぐに押しかえた。そして話題が変わる。

「毎日、ここで食べてたの？ へえ、ほんとうに仲がいいんだね。つきあってるの？ やだ、赤くなんないでよ。とおこ、色白いから赤くなるとすぐわかるね。あたしなんて真っ黒でさ、日にやけちゃって。夏なんか大変だよ。日焼けどめ？ しないしない。汗で流れちゃうよ。そうなんだよ、ランニングしてさ。学校のまわり走るんだ。十周も！ 冬はもっと走らされる。そのあと腹筋でしょ、素振りでしょ。一年生のときはローラー引いて聖地、これがくっそ重いんだ。二年生になってようやく楽になったけど、片付けもあるじゃん？ 試合前とかもつとたいへんだよね。けっこう、忙しいんだ。試験週間くらいだもんね、休みになるの。そういえば中間試験もうすぐだね。」

範囲、来週発表だっけ。とおこは得意、なに？ 英語かあ。わたしも英語けっこういける。数学は？ ねえ、牧原くん、息してる？」
あぜんとしてしまう。これだけ話してるのに、パンはちゃんと口におさまっていく。息をしているかと聞きたいのは、幸詞のほうだった。

「獣は海からやってくるってさ」

ゴールドディング『蠅の王』

いつものとおり、幸詞はチャイムが鳴るまぎわまで、教室に入らなかつた。鉄扉を閉ざし、計算された速度で渡り廊下をゆっくりわたっていった。

ふだんから、教室は八時半をすぎてもさわがしい。教師がくれば少しは騒ぎはおさまるが、私語のざわめきまでは消えない。担任がくるまでの十数秒のあいだに、幸詞は教室にすべりこむのだ。だれも幸詞には気がつかないはずだった。しかし、幸詞は奇声をもって迎えられた。それは幸詞のもっとも浴びたくない注目の声だった。――

—キタゾツヒューヒューデートドワンダキスシタノカキシヤカイケンキシヤカイケ
ンカップルアツイ——クラスメイトの重なる声は意味を成さなかったが、し
だいに、とおこのことだとわかってきた。席につくこともできず入口で幸詞は男子
に囲まれた。クラスメイトがどの顔も見知らぬものだった。それは騒ぐことそのこ
とに興奮して人の顔をしてなかった。歯と歯茎が、舌と口蓋が幸詞にかみついていた。
為す術もなく立ちつくしていた。遅れて入ってきた担任が声をあらげてクラスを制し
ようとしたが、だれもしたがわなかった。喧騒は女子にまで伝染して、教室はパニッ
クにおちいった。幸詞は自分の席につけず、そのままそばのイスに無理やり座らされ
た。クラスメイトの輪は教室の中で密度を濃くした。声がいっそう高くなった。——
ドナンデスカキシスタンデスカイエヨナンカシャベレヨセキニツキナサアイナン
カイエヨコッチムケヨナバカジャナイノクラインダヨテヲツナイデナニシタノアイソ
ワライシネ——手が出た。つつきまわされた。獣の胃袋に幸詞は飲みこまれた。

もはや、これ以上に望むべきものなくなった今は、自分が不当な人間にな
っていくのが感じられた。

ラディゲ『肉体の悪魔』

騒ぎがいったんおさまったのは、一時間目がはじまる直前だった。

自分の席についても、幸詞は憔悴して授業に集中できなかった。なにが起こったの
か把握しきれいでなかった。

前を見ようとしたら、それだけで小さな嬌声が背後にきこえた。とおこの背中がび
くりとふるえた。痛い、胸が。

休憩時間がくるのがおそろしかった。狂乱は、小学生の、あの時期を思いだせばか

んたんに推測できた。

「マタエラソウナ本読ンデルゼ！」

読んでいた文庫本をバケツにつっこまれたあのときの心の昂ぶりが、今よみがえっている。さらにひどい強さで自分を巻きこんでいた。とおこにもよくないことが起こることを、予想できたからだ。

自分よりひどく傷ついている。そう直感した。自分は逃れる術を知っていて、今日までそうしていたが、とおこがどのようなようにそれらに直面していたのかわからなかった。わからないから余計に彼女のことが心配になった。

しかし、そこで声を高くあげて、獣を遠ざける手法など、幸詞は知らなかった。人を守る手段がわからない。

好きな人をあらゆる災難から守りたいのに、なにをすればいいのか。

チャイムが鳴る瞬間に、獣がふたたび幸詞を虜にした。

「オイ、シャベレヨ」

「イツモクラインダヨ。ドックイクシ」

「ドッカデエツチシテンジャナイノオ」

下卑た笑いが起こった。

「おい、アイソワライ」

一瞬わからなかったが、二度繰り返えされてそれが自分への呼びかけだとわかった。

「一年のときもそうだったよな。こいつさ、クラスのこと、無視すんだよ」

「何言っても愛想笑い浮かべてさ、気持ちわりいんだよっ」

いきなり机が浮いた。うつむいた幸詞の視界に、革靴のどがった先が見えて、机の脚を蹴りあげた。

「やめなさいよ」

英田の声だった。

「あんたたち、うらやましいだけなんですよ。どっちにしても、これでしばらく彼女できないね。子供っぽいことしてんじゃないよ」

「うらやましかねえよ。ばーか」

幸詞はいたたまれなくなってきた。ずっとうつむいて、顔をあげられなかった。とおこは今どうなっているのか。この場を逃げだしたかった。しかしとおこの手をひいて、連れてでる勇気もなかった。

頭が真っ白になった。

そして教室をひとりで飛びだした。

「自分が殺られるのを承知しながら、部屋の中でじっと待ってるやつおこさんのことを考えるのは、ぼくにはたまらないんだ。とても恐ろしくって」

へミングウェイ「殺し屋」

あとを追ってくるだろうとおもった。

獣が？ いや、とおこが。

しかしだれもあとを追ってこなかった。

階段、渡り廊下、鉄扉の前、そして司書室でふりかえった。だれもやってこなかった。

司書室は午前中の日ざしにやられておっとしていた。窓はあけなかった。

逃げてきてくれないだろうか。

鉄扉を閉ざしてしまえば、ここはふたりだけの場所になる。

息をひそめて、幸詞は待った。

だが駆けのぼってくる足音も、扉の甲高くきしむ音もなかった。そして、なんと虫のいいことを考えるものかと自分を蔑んだ。

いま教室にどんなふうでいるのだろうか。

なぜ逃げだしてしまったのか。

疑問が泡だちのように幸詞の心を支配した。床を透過して教室が見えるかのように、幸詞は足元を凝視した。

二時間目が終わった。

三時間目がはじまった。

やがてそれも終わろうとしていた。幸詞は吐き気をおさえて立ちあがると、よろよろと階段をおりた。

教室は遠かった。いつにもまして遠く、チャイムが鳴ってもたどりつかなかった。

中はいつもの騒がしい様子に思えた。開けても、いつものように自分は気づかれな
いのではないかと、錯覚した。

おそろおそろ扉を開けた。

とたんに静まった。

全員の目が、幸詞にあつまった。

「てめえ」女子がひとり詰めよってきた。「なに一人で逃げてんだよっ」

「さいてー」

「カレシがこれじゃ最悪だよねえ」

「かっこわりい」

怒号がとびかった。その一つ一つが音ではなく意味として突き刺さってきた。入り口で立ちつくす幸詞に、みなは容赦なかった。顔をあげられなかった。

とおこを見たかった。あやまるとしたら今しかなかったが、幸詞はまた逃げだした。今度は学校から。

いつもふたりで歩いた道を、ひとりで走った。家まで、わき目もふらず、息も浅く。

夕方、呼び鈴が鳴った。無視して出なかった。夜もふけて外をうかがうと、玄関前に、通学靴がおいてあった。

しかし、なお彼の耳の底に機関車の根気よいつぶやきが、夫人の名前の音節（シラブル）を反復しているのを聞いた。……とある樹の下に足をとめ、そのリズムをふりはらった。暗闇の中で彼女が身近にいることも、また彼女の声が耳に触れることも感じなくなっていた。……何も聞こえてこなかった。夜はまったく静寂であった。

ジョイス『ダブリン市民』

鈴がいくども鳴った。
朝な夕なに、一度ずつ。
火曜日。

水曜日。

木曜日。

合計六回の鈴が幸詞を呼んだ。

とおこだとわかっていた。

しかし幸詞はとじこもった。三日のあいだ、一度も外に出なかった。こづきまわされた制服姿のまま布団をひっかぶった。

家にひとりしていると、外の音が大きく聞こえてくる。布団の中でやりすごした。頼るべきものはなにもなかった。本は役には立たない。文字は読まなければ心に入っていない。自分が少しずつ人でないものに変わろうとしているのがわかった。心が消えるのであれば、どんなものになってもかまわないとさえおもった。

金曜日。朝の呼び鈴を、息を詰めてやりすごした。

しかし夕方は鳴らなかった。

窓の外に日が沈む気配を感じながら、いつ鳴るかいつ鳴るかど待ちわびた。

すっかり暗くなった室内で、幸詞は新たな甘えに気がついた。なんとひどいことをしているのか、とおこをどれほど傷つければすむのか。

涙に触発されるように嗚咽がもれた。ひとしきり泣いたあと、幸詞ははじめて、玄関をあけた。とおこの去った空間にまみえて詫びようと思ったのだ。

暗闇のもと、とおこが立っていた。

「よかった……」

とおこがつぶやいた。

幸詞はそのつぶやきにぶたれて、立ちすくんだ。

風の音がして、やがてとおこの泣き声がそれにとってかわった。

とおこが落としたかばんを拾いあげて、しかし幸詞はなにも語りかけることができなかつた。

逃げ出したいとは思わなかつた。

しかしどうしていいかわからなかつた。

ふたりはそれから一時間、終始無言で、おたがい手を触れることもしなかつた。だが心はどこか触れあおうと模索していた。しかし幸詞は自らの心のありどころがわからなかつた。

やがて、とおこは帰っていった。

かばんを渡すとき、ようやく、幸詞は「ごめん」と言った。

とおこは最初首を横にふつた。

それから縦にふつた。

夜、意味をはかりかねて、幸詞はあらゆる可能性を考え、否定し、闇のなかをうごめいた。

次の朝、およそ登校するには早い時間に呼び鈴が鳴った。幸詞はまだベッドの中にいた。窓から見ると玄関前に立っているのは英田だった。

いそいで服を着替えて扉をあけた。

幸詞の顔を見て、英田が手をあわせた。

「ごめん。あたしが悪かつた」

「なんで」

「あたしが、しゃべっちゃったんだよね。そしたらさ、バカがもりあがってさ。こういうのに弱いんだね、牧原くんは。ううん、強いやつなんていないか。でも牧原くん

もよくない。とおこを置いてっちゃだめだ。まだ付き合い浅いからよくわからないけど、とおこもさ、青くなっていた。でも牧原くんのこと、心配してたんだよ」

玄関先を沈黙が支配した。

その沈黙を、幸詞は破れなかった。

英田が幸詞の顔をのぞきこんだ。

「今日、学校行ける？ きにくいとは思うんだけど、まだ何人かはわかってないやつもいると思うんだけど、でも、行かないとき、ずっと行けなくなるよ。このままじゃ、とおこもつらいじゃん」

きのうのとおこの表情が思いだされて、そして、ようやくうなずいた。

そのとき、ふと動くものが見えた。

目をあげると、とおこが英田のうしろに立っていた。

人間の社会と、人間の生活が近くなってきた。私は努力して進まねばならない。ほかの人々のように生きるために……

シャーロット・ブロンテ『ジエーン・エア』

運動部の朝練におかう学生だけがちらほらいたが、幸詞はうつむいて歩き、その足元しかみえなかった。

とおこ英田にはさまれるように、通学路のいくつもの角をまがった。

英田はとおこにだけ話しかけた。宿題のこと、自分の兄のこと、テストのこと、近所の犬のこと、クラブのこと、テレビのこと、先生のこと。学校の話になるたびに、英田は話題を変えているように思えたが、それがいつものように気まぐれな話しかた

ゆえなのか、幸詞を気遣ってゆえなのかはわからなかった。

幸詞はずっと無言を通していた。
足取りが重い。

クラスでまたなにか言われたとき、自分はまた逃げ出さずにいられるだろうか。

(いじめられて——) そう思ってちいさく首をふった。(——いや、あれはいじめじゃない) また首をふった。

「牧原くん、どうした？」

英田が声をかけてきた。

最後の交差点で幸詞は立ち止まって、ふたりを見た。信号は青。

とおこの顔は青く、その目は幸詞の瞳の奥をのぞくように、おどおどとゆらいだ。

英田はスカートをひるがえらせてかけだした。そして、

「あたし、先に行ってる！」

ぜったい来るんだよ！

教室に！」

と言って交差点をわたった。

信号が赤に変わった。

「あの……」

くちびるがはりついて、急に声を出せなかった。

「……あの、ごめんね。あり——」

とおこが幸詞の言葉をさえぎった。

「だいじょうぶ。わたしはだいじょうぶ」

幸詞は言いかけた言葉を飲みこんだ。

とおこは懸命に笑おうとしているように見えた。幸詞もその表情に合わせようとし

た。

もう一度、さっき言いかけた言葉をいおうと、口を開くと、のどの奥がからんだ。しかし、ちゃんと自分のことを言わなくてはと思った。

「ぼくは……、ぼくはいままでずっと、だれのことも見くだしてた。ほんとはぼくが一番かしくくて、ほかのやつはみんな子供だって。

でも、ちがうんだ」

言葉をさがした。しかし、かっこいい言葉は見つからなかった。単純な、弱い、幼い言葉しか出てこなかった。

「……ぼくはおとなになれない」

とおこは幸詞のかばんを取りあげて、自分のかばんと一緒に足元においた。

自分と同じくらいの大きさの手が、いまは自分より大きくおもえた。その手が幸詞の手をつつんだ。

ひんやりしていた。

「だいじょうぶ。ゆっくりおとなになろう。いっしょに」

さっき飲みこんだ言葉が、ふいにわきだしたとき、信号が青に変わった。

校門からまっすぐ教室に向かった。中学に入って、はじめて、図書室に行かなかった。

教室は誰もいなかった。白いカーテン越しに朝日がある。机にはカーテンの影が模様をこしらえていた。

席に座るのは拷問のようだった。

とおこは自分の席につかず、幸詞の前に立った。机に置かれたとおこの手がふるえている。強く握りしめて、白くなっていた。

最初にやってきたのは、朝練のための運動部の部員のようだった。

「あ、来たんだ」

だれの声かわからなかったが、思わずうつむいてしまった。とおこの手がいつそう固くにぎられた。

ひとり、またひとりとやってくる。

ひそひそと声がある。

しかし、だれもそれ以上、幸詞に近づいてこようとはしなかった。

八時のチャイムが鳴った。

「あ、水」

ふいに思いだして、幸詞は顔をあげた。とおこが弱々しく、しかし、励ますように笑顔をみせた。

「だいじょうぶ。毎日ちゃんとあげてるんだから。夕方、たっぷりあげれば、だいじ

ようぶ——」

その視線は幸詞の目元にあった。

そのとき、ガタンと音がして、幸詞の目の前に大きな影が立ち上がった。

英田が悲鳴のような声をあげた。

「ちょっと、松中！」

「いいんだよ。俺は」

松中は幸詞の正面のイスにまたがって、机に肱をのせた。半袖からのびる松中の腕は、黒くごつごつしていた。

「牧原。堂々としてろ。逃げたのはかっこよかったけどな。いいんだよ、もう。来れたんだからさ」

「なに、わかったふうなこと言ってるの？」

「だから、いいんだよ、俺は。牧原とはちょっとあってな」

「なに？」

「教えない。英田、しゃべりだからな」

「ひどーい」

「な、牧原——」立ち上がった松中は、あの林間学校の朝のように、にやっと笑った。

「——けっこうやるじゃん」

教室のざわめきが大きくなった。

しかし、喧嘩は起きなかった。ほっとした。そして反対に、誰かがあやまりにくることはしてほしくなかった。授業中、落ち着いてくると、そんなふうに感じた。

ななめ前にはちいさな背中があった。

自分はこんなに弱くて、その背中も弱々しくみえて、それなのにどうにか生きていかなければならない。しかし、その方法を彼女はすでに見つけていた。

自分は見つけられるだろうか。

幸詞は首をふった。自分は嵐にまっこう対抗していけるほど、強くなれることはないだろうと悟った。

嵐はいつか過ぎ去る。そのことはすでに知っていたはずだ。

だが嵐に負けてもいけないのだ。

次は沈んではいけない。

この道行きは、一人乗りの船ではないのだから。

とおこさちうた覚書

二〇〇六年の八月から九月にかけて書き、九月末締め切りのちゅうでん児童文学賞に応募した。審査員は、河合隼雄、今江祥智、長田弘の三氏だったが河合さんは病氣療養中のため加わらなかった（同年七月に逝去された）。

この賞には前から出したかったが敷居が高かった。というのも今江さんの存在が大きかった。児童文学を勉強し始めたころ、目を見張った多くの作家は、みな今江さんの推していた人だった。

しかし、勢いにまかせて投稿した。

翌年二月、誕生日の夕方に最終選考に残っていることが告げられた。今江さんが手

に取ることが確定したのだ。どきどきの一週間。かくて、奨励賞です、と電話があった。奨励賞というのは、審査員の誰か一人が推すのが通常で（二人推せば佳作になる）、このとき、すでに河合さんが療養中だったことは知っていたので、さてどちらか、ということになる。

かくて授賞式に。

少し早めに会場に到着すると、控え室に案内された。ドアを開けて入ったとき、中に、今江さんがひとり座っておられた。初めてお会いするのだ。声をかけご挨拶をしようと思ったとき、今江さんが立ち上がった。手に持った紙の束（それはぼくの原稿で、遠めでもものすごく書き込みがあるのがわかった）を、肩より上にすこし上げて見せて、

「くぼさんですか？ この原稿、売っていいですか？」

と、あののんびりした京ことばでおっしゃった。

その日の授賞式、大賞・佳作作品をぜんぶすつとばして、今江さんはこの「とおこ

さちうた」のことで、講評で話された。なんで録音してなかったんだと、今さら悔しく思うが、出版に値するので編集者に手渡したいとまで言っていたのだ。もちろん未だオファーなんて無いけれども、それでいいのだ。

このことが書く原動力となっている。

作品を書いている途中、この作中の舞台のひとつ、とおこの住むアパートのモデルアパートに行った。二十年前と同じままで残っていた。無人だった。投稿した翌週、再び訪れた。アパートは取り壊され、駐車場になっていた。

おそらく書かれるべくして書いたのだろう。

二〇一〇年夏　くぼひでき

この作品、文面は投稿時のまま。誤字脱字もあると思われるが、ご寛恕願いたい。

奥付　執筆二〇〇六年夏　ネット文書化二〇一〇年

七月二〇日　連絡先　QVO@yahoo.co.jp